《正岡子規（36）の続き》その273

子規周辺の人びと（二十三）

平岸　三八

天然居士こと米山保三郎〔明治二年一月―明治三〇年五月二九日（一八六九―一八九七）〕は金沢の人。第一高等中学校以来の漱石の親友。明治26年、東京大学文科大学哲学科卒。大学院で「空間論」を研究中チフス（？）に罹って早世した。

その死を任地熊本で知った漱石は、友人斎藤阿具（のちの一高教授）に次の如く書く。

「米山の不幸返す返す気の毒の至に存候。文科の一英才を失ひ候事、痛恨の極に御座候。同人如きは、文科大学あってより、文科大学閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候。蟄龍未だ雲雨を起さずして逝く…」と。

蟄龍とは、かくれている龍、轉じて未だ時を得ざる英雄にたとえる言葉。即ち米山がすぐれた大秀才なのに、いまだ世に知られないことを惜しんだ言葉である。

漱石の「我輩は猫である」にも、天然居士は登場する。名を曽呂崎といい、「卒業して大学院に這入って空間論と云う題目で研究していたが、余り勉強し過ぎて腹膜炎で死んで仕舞った。曽呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」と、主人公の苦沙弥が天然居士について迷亭に説明している。ここでは腹膜炎で死んだことになっているが、腸チフスに罹り、穿孔性腹膜炎でもおこしたのであろうか。

子規も「筆まかせ」第二編（明治二十三年）に友情をこめて米山について次のように記述している。米山については、第一編に既に漱石を畏友、米山については高友（なお日本海海戦の参謀秋山眞之については剛友）と評しているのであるが。

極めて長文で「悟り」と題されている。長い引用を許されたい。

「余が猿楽町の下宿に居りし時なれば、明治十九年の秋の頃なりけん。金沢の人、米山保三郎氏始めて余の寓を叩けり。同氏は同級の学友にて、しかも同組に在りし故、学校にては多少談話を試みしかども、そは多く諧謔のみなりき。氏は恐らくは、余が如何なる人物なりしか知らざりしならん。余も亦おもへらく、氏の長所は数学のみ（氏ノ父ハ金沢ニテ有名ナル数学者ナリキト）其他は眞に子供のみと。氏が突然我宿所に来らんとは実に思ひの外なりき。余は氏を延いて室内に入り、談話をはじめけるに、余は一驚を喫したり。何となれば、氏の話は数学上の最高等なる部分、微分積分に移りたればなり。余は二驚ヲ喫したり。何となれば、氏の話は数理より哲理にうつりたればなり。余は氏が哲学を知らんとはこれまた意想外の出来事なりき。余は三驚を喫したり。何となれば、氏は已に哲学者の幾分を読めり。少くもスペンサーの哲学原論を読みたればなり。而して最後に最はげしく余は四驚を喫せり。何となれば、氏の年齢は余より二歳も若ければなり。余は在郷の時は、朋友中最年若きものにして、此幼年なることが、余の最慢心したる部分なりき。然るに余の東京へ来るや、共立黌に在るも予備門に在るも、常に少年者と伍せり。只々同学生中、余が郷里に在て期したる如き有為の人を見ざりし故安心せり。而して今米山氏は、余より幼にして、しかも其談話する所は、余等の夢想にだも知り得ざりし高尚超越の事のみなれば、此時余の心は生来未だ曾て知らざるの刺激を受けたり。」

話は尽きず、夕景ともなったので晩餐は今もある松本楼の西洋料理（学生のことだから最も安いものを喰べ、代金は子規が払ったのだろう）を食べ、再び子規の下宿に戻り夜半まで話し続けた。それでも猶分れるのが惜しく「余が家に一泊したまはずや」と云ったのに、氏はたやすく「泊るべし」と答え、翌朝帰っていった。

子規が受けた「四驚」の衝撃がいかに強烈であったかは、あれほど好きであった野球が此日あることになっていたが、今はそれも嫌になり、友人のすすめでやむを得ず、断りのため学校に行ったが、幸い此の日の勝負は取り止めとなっていた。